

山岸文庫蔵『不知夜記』解題・翻刻

久保貴子

藤原為家の晩年の妻である阿仏尼（安嘉門院四條）の著で、広く『十六夜日記』と称されている作品は、伝本も少なくはなく、諸本間には異同も多い。さらに書入れなども極めて多く、諸伝本間の対校も頻繁に行われている。『十六夜日記』は概ね、一、序・旅立ちまで・二、東海道の旅の日記・三、鎌倉滞在記・四、長歌（五、奥書（一）・裏書——残る蓬とかこちける）→永仁六年三月一日書之——六、奥書（二）——この阿仏房と申す人は為相の母なり——、という構成になっているが、この後さらに『阿仏仮名諷誦』を続けたり、合綴する伝本も多く、明らかに性格の異なる章段によって構成される本文であるため、その章段ごとの個別な成立段階も十分に想定されてよいだろう。

したがって、諸伝本の厳密な系統分類は、本文読解の視点という意味を加味してもなおさら、避けられない課題であると考えられる。そのことがひいては、現存『十六夜日記』の成立過程をも探ることになると思われるからである。

本稿は、本学山岸文庫に蔵している『不知夜記』と題する写本一冊（同文庫出納番号3524）を全文翻刻する。『不知夜記』とは、いうまでもなく『十六夜日記』の数多い別称の一つである。『国書総目録』等には未掲載本である。その

奥書は以下のようである。

不知夜記阿佛房鎌倉紀行也阿佛房

葛原親王十一代後胤佐度繁女安嘉門院

右衛門佐為相卿母後為尼名阿佛房寛文

年中焼失今於是模写而已

延寶五年冬後十二月十一日

右近衛権少将藤原判

後遊紙には、三条西家旧蔵であると伝える山岸氏の識語を有している。この奥書は、静嘉堂文庫蔵簡治旧蔵鈴木弘恭自筆書入本（『阿仏房紀行』）に弘恭が下冷泉為経卿本から書写したとする奥書と一致するものである。この静嘉堂文庫蔵本は、歌人で国文学者であった鈴木弘恭―号・十八公舎、天保十四年（1843）―明治三十年（1897）―が、全編にわたりこの為経卿本を以って校合しているが、「冷（及び冷本）」として示される校合結果も、ほぼ完全に山岸本本文と合致するものである。したがって、山岸本は下冷泉為経本の正確な模写である可能性が高く、阿仏自筆本との関わりをも孕む、様々な看過しがたい問題を提起するものであると考える。そこで、本稿においては基本的な書誌事項と諸本との校合結果の報告に留め、詳細の考察は改めて別稿としたい。

猶、本学常磐松文庫蔵本『いさよひの記』に関しては、本稿に先んじていささかの報告を行った（「別冊年報Ⅷ」平成

十六年三月)。合わせてご参照願いたい。

以下に、山岸文庫本の簡略な書誌事項を示すこととする。

実践女子大学山岸文庫蔵『不知夜記』

一帙一冊。

袋綴・江戸期写か。

表紙、栗皮色菱繋ぎ模様空押地紙表紙。二七・三種×二〇・〇種。外題、表紙左肩に短冊型紙題箋十八・九種×三・三種を貼付『不知夜記』と墨書(山岸氏筆)。

扉題・内題共になし。

料紙、極紙。前後見返し共に、白紙。前遊紙一丁、後遊紙二丁、墨付三十二丁。

每半葉十行、一行二十一字内外、和歌は一字ないしは二字下げ一行書き。長歌以下も同様、同筆。

印記、「山岸文庫」の長方形双郭朱印(前遊紙表右下・一丁表右下)、「実践女子大学図書館印」の長方形单郭朱印(後遊紙二丁表左下)。

卷末に「延寶五年冬後十二月十一日／右近衛権少将藤原判」の奥書を有する。後遊紙には、「昭和廿四年四月下浣 琳琅にて／岸廻舎」と署名があり、また、「不知夜記 一冊 三条西家旧蔵本也 偶入余手中者也／去六月中浣依囑于圖書寮遠藤氏來多忙云々／九月廿七日与東伏見伯同道而到圖書寮製本出来云々／談数分及朱子全書裏打修理如遠藤氏者難得／装潢師也云々／昭和二十四年九月廿八日黄昏爽涼風微月在／半天 岸廻舎識之」と識語が記されている。

乱丁、落丁はないが、所々に墨筆による書入れ、ミセケチなどがある。山岸氏識語が伝えるように、補修済で保存状態は

良好、虫損等はほとんどない。

凡例

- 一、実践女子大学図書館山岸文庫蔵『不知夜記』一冊を底本として翻刻する。
- 二、丁は、墨付を以って数え、丁移りは」として示し、その下の（ ）内に丁数を記す。また、表裏は同じ（ ）内にオまたはウと省略し、カタカナで記す。但し、表紙・見返し・前後遊紙の場合は、その旨を「下（ ）」内に記し、丁数には含めない。
- 三、改行は、原則として底本のままとする。
- 四、翻刻は、朱筆等の別を含めて底本に忠実なるを旨とし、印刷の都合などにより左のように処置する。猶、不審の箇所があつても、みだりにこれを改めることはしなかつた。
 - A、漢字・仮名は、概ね通行字体によるが、一部書き癖（「ハ」「ミ」など）を残したところもある。
 - B、反復記号「ヽ」「ヾ」「くく」、補入記号、見せ消ちなどは原則として可能な限り底本のままとする。虫損等で判読不可能な文字については、□印を用いた。猶、特に注意すべき箇所については、欄外にその旨を示した。
- 五、本文校合の基準は、概ね以下の通りとした。
 - A、漢字と仮名、仮名遣いや送り仮名等の異同は原則として示さないこととしたが、それによって異義が派生すると考えられるものに関してはあげた。
 - B、漢字に読み仮名を施してある場合は、原則として示さないが、音訓の異同のあるものについてはあげた。

六、校異の表示は、概ね以下の通りとした。

A、校合箇所は、底本文右に数字を施し（半葉毎に通し番号とする）、欄外にその数字毎に、対校諸本の異同を記した。

B、底本の本文を対校本が有しない場合は、「欠」と記した。

C、校異底本文をひく際、それが長文の場合には、その最初と最後だけを記すこととし、中間は省略して〜で示した。

七、翻刻にあたり、校合本は、天理図書館蔵九条家旧蔵本・島原図書館蔵松平文庫本・細川家永青文庫蔵本・十六夜日記残月抄本・静嘉堂文庫蔵簡治旧蔵本・静嘉堂文庫蔵簡治旧蔵鈴木弘恭自筆書入本・慶応義塾図書館蔵本・前田育徳会尊経閣文庫本を用い、山岸文庫本との校異を欄外に示した。

略号はそれぞれ、九・松・永・残・静・鈴・慶・尊とする。

猶、本文の構成上の相違から、「鎌倉滞在記」までは九・永・残との、「長歌」以降は松・永（除、奥書二）・残・静・鈴・慶との、「仮名諷誦」は九・尊との異同を示す。また、松平文庫本の長歌以降の本文については「長歌以下の本文は、他系統からの写し加えではないかと思われる」（江口正弘編『十六夜日記 校本及び総索引』笠間書院・昭和四十七年）との見解もあるが、『十六夜日記』本文の構成特質から、他の諸本にもその可能性はある事を考慮した上であえて、一伝本として扱った。

本稿に際し、御高配を賜わった諸文庫・諸図書館に、記して深甚の謝意を表します。

不知夜記

┌ (表紙・題簽左肩)

└ (見返し)

(白紙) ┌ (前遊紙才

所藏番号記載小紙片貼付

右上部・

山岸文庫藏書印(右下部)

(白紙) ┌ (前遊紙・ウ)

むかしかへの中よりもとめ出たりけんふみのな*¹

はいまのよの人の子は□^夢はかりも身のうへの事と

はしらさりけりな水くきのをかのくす²ハラかへす

くもかきをく跡たしかなれともかひなきも

のハ親のいさめなりけり又賢王の人をすて給

ハぬ政⁴ことにももれ忠臣の世を思ふなさけにも

すてらるゝものハかすならぬ身ひとつなりけりと思

ひしり⁵なは又さてしもあらてなをこのうれへこそや

るかたなくかなしけれさらにおもひつゝくれはや

まど歌の道ハたゝまことすくなくあたる⁶すさみ

〔山岸文庫蔵書印右下部〕(一オ)

- 1 名をは―九・永・残
- 2 くす葉―残
- 3 「けり」欠―永・残
- 4 「こと」欠―永
- 5 なから―残
- 6 すさひ―永・残

はかりとおもふ人もやあらん日の本の国にあま

の岩戸ひらけし時¹より四方の神たち*²かくらのこ

と葉を³はしめて世をおさめ物をやはらくる中

たちとなり³にけるとそこの道のひしりたちハしるし

を⁴かれたり*⁴さても又集をえらふ人ハためしおほ

かれと*⁵二たひ勅をうけて世々にきこえあけたる家⁶

はたくひなをありかたくや有けんそのあと*⁷しも

たつさ⁸はりてみたりのをのこゝとももゝちの哥

のふるほん⁸こともをいかなるえにか有けんあつかりもた

る事あれとミちをたすけよ子をはくゝめ後の世を

〔(一ウ)〕

- 1 「より」欠―残
- 2 の―九・永・残
- 3 けり―九
- 4 たる―永
- 5 たりける―九・残
- 5 とも―九
- 6 「家」欠―残
- 7 あとに―九・永・残
- 8 ふるほくととも―九・永・残

とへとてふかき契りをむすひをかれしほそ川のなかれ

もゆへなくせきとめられしかハ跡とふ法の燈も道を

まもり家をたすけんの親子の命もをろともにきえ

をあらそふとし月をへてあやうく心ほそきながら

なにとしてつれなくけふまでハな⁶らふるらんおしから

ぬ身ひとつハやすくおもひすつれとも子をおもふ心の

やミハなを忍ひかたくみちをかへり見るかきりハやらん

かたなく*⁸さても猶あつまのかめの鏡にうつせは

くもらぬかけもやあらハるゝとせめておもひあまりて

よろつのは、かりを忘れて身¹⁰をよふなき物¹¹にな

「(二)オ」

しはて、ゆくゑもなくいさよふ月にさそはれて出²

なむとそおもひなりぬるさりとて文屋康秀かさ

そふにもあらずすむへき国もとむるにもあらずこ

ろは三冬たつはしめの³空なれハ⁴ふりみふらすミ

時雨もたえず嵐にきほふ木の葉さへ涙と、もに

みたれちりつゝ、ことにふれて心ほそくかなしけれと

人やりならぬ道なれハいきうしとでもと、まるへきに⁵

もあらてなにとなくいそきたちぬめかれせさりつる

ほとたにあれまさりつる庭もまかきまましてと見

まはれてしたはしけなる人*の袖のしつくもなく⁶

「(二)ウ」

1 と、め—九・永

2 まほり—永

3 「の」欠—九・永・残

4 あやふく—残

5 物から—残

6 「ハ」欠—九・永

7 恨は—九・永・残

8 なくて—九

9 うつさは—永・残

10 「て」欠—九・永・残

11 ようなき—九・永

えうなき—残

1 ゆくりもなく—九・永・残

2 「て」欠—九・永・残

3 さためなきぞら—残

4 ふりふらすみ—九

5 「も」欠—九

6 人々—九・永・残

さめかねたる中にも侍従大夫などのあなかちに

うちつくしたるさま1*心くるしけれハさま2〜いひこ

しらへねやのうち3*見*れハ昔の枕4*さへさなからかはら

ぬを見るにもいまさらかなしくてかたはらに書つく

しと6〇めをくふるき枕7のちりをたに我たちさらハ誰かはらん

代々にかきをかけける歌の双紙とものおくかき8などとして

あたならぬかきりをゑりした、めて侍従のかたへ

送るとてかきそへたる哥

和かの浦にかきと、めたるもしほ草これを昔のかたミとハ見よ9

あなかしこよこ波かくな濱千鳥ひとかたならぬ跡をおもハ、

「(三才)

是を見て侍従の返事いととくあり

つるによもあたにハならしもしほ草形見をみよの跡1にのこさハ

まよハましをしへさりせハ濱千鳥ひとかたならぬ跡をそれとも

このかへりこといとおとなしけれハ心やすくあハれるなるにも

昔の人にきかせたてまつりたく2*又うちしほ3*れぬ大夫

のかたはらさらすなれきつるをふりすてられなむ

名残4*〇ちにおもひしりて手ならひしたるをミれは

はるくと行〇さきとをくしたハれていかにそなたの空をなかめん

と書つけたる物よりことにあハれにておなし

かミにかきそへつ

「(三ウ)

1くむし〜九

くつし〜永 (つくつし〜「つ」ミ)

2いと〜九・永・残

3うちをみれば〜九

4の「さへ」欠〜九・永

5「に」欠〜九・永

6「し」欠〜九・永・残

7われ〜永

我ワ〜残

8「など」欠〜残

9とも〜残

1せは〜残

2たくて〜九・永・残

3しほたれぬ〜九・残

4あなかちに〜九・永・残

つくくと空ななかめぞ恋しく八道とをくともはやかへりこん

とそなくさむる山より侍従の兄の律師も出たち

見むとておハしたりそれともいと*心ほそしとおもひ

たるをこの○ならひとをミて又かきそへたり

あたになく涙ハかけし旅衣心のゆきて立かへるほと

とハこといミしなからなミたのこほるゝをあらゝかに

物いひまきらハすもさまゝあハれなるをあざりの

*みは山ふしにてこの人々よりハ兄也此たひの道

のしるへに送りたてまつらんとて出たゝるめるをこ

の手ならひに又ましらハさらんやハとてかきつく

「(四才)

たちそふそうれしかりける旅衣かたみにたのむ親のまもりハ

女子ハあまたもなしたゝひとりにてこの比ちかきほ

との女院にさふらひ給院のひめ宮ひとゝころむま

れ給し事にて心つかひもまことしきさまに*おと

な*しくおはすれハ宮の御かたの御こひしさも

かねて申をくつゐてに侍従大夫などの事ハくゝ

ミおはすへきよしもこまかに書つ*けておくに

君をこそ朝日とたのめ古里にのこるなてしこ霜にからすな

ときこえたれハ御かへりもこまやかにいと哀に

かきて歌の御返事ハ

「(四ウ)

- 1 おりしも九
- 2 「と」欠九・永・残
- 3 もの九・永
- 4 たゝ九・永のみ残
- 5 君は九・永・残
- 6 をくらん(りたてまつ)欠九・永
- 7 「、」欠九
- 8 「又」欠九
- 9 はら九・永

- 1 女子残
 - 2 「比」欠九・永・残
 - 3 むまれ給へりしはかり九
 - 4 うまれ給ひしはかり永
 - 5 うまれたまふはかり残
 - 6 おとなくしく九
 - 7 「御」欠九
 - 8 つ、けて九
 - 9 かへしには九・残
- 返事には永

おもひおく心と、めハ故郷の霜にもかなしやまとなてしこ
 とそある五つの子どもの哥残¹なく書つ、けぬるも
 かつハいとをこかましけれと親の心にハあハれに

おほゆるまゝにかきあつめたるさのミ心よハくても³

いかゝとてつれなくふりすてつあはたくちといふ所

よりも車ハかへしつ*⁵ほとなくあふ坂の関こゆるほとにも⁶

さためなき命ハしらぬ旅なれと又相坂とたの^めてそゆく

のちといふ所ハ⁷こしかた行きき人も見えず日はくれ

かゝりていと物かなしとおもふに時雨さへうちぞゝく

うち時雨故郷おもふ袖ぬれて行ききとをきのちのしののハラ

「(五才)

- 1のこるなく―九
- 2たり―九・永・残
- 3は―残
- 4そ―九 「も」 欠―永
- 5つる―九
- 6に「も」 欠―残
- 7「ハ」 欠―九

こよひハ鏡といふ所につくへしとさためつれと暮はて、
¹*行つかすもり山といふ所にと、まりぬこ、にもなを³
 時雨そしたひきにける⁴

いと、なを袖ぬらせとややとりけんまなく時雨のもり山にして⁷

けふハ十六日の夜なりけりいとくるしくてうちふしぬ⁸

いまた月の光かすかに残たる明ほのにもり山を出て⁹

ゆくやすの川わたるほとさきたちてゆくたひ人の¹²

駒のあしの音はかりさやかにて霧いとふかし¹³

旅人もみなもろともにあさたちて駒うちわたすやすの川きり¹⁶

¹⁷十七日の夜ハをの、しゆくといふ所にと、まる月出て山

「(五ウ)

- 1え行つかす―九
- 2もる山―九
- 3時雨猶「そ」 欠―九・永・残
- 4けり―九・永・残
- 5我―九
- 6もる山―九・永・残
- 7しも―九・永・残
- 8「うち」 欠―残
- 9もる山―九
- 10やす川―九・永・残
- 11「たひ」 欠―九
- 13「の」 欠―永
- 14は―残
- 15さき―九・永
- 16やす川のきり―九
- 17十六日「の」 欠―九

の峯にたちつゝきたる松の木のまけちめみえて

いとおもしろしこゝに夜ふかに霧のまよひにたと

り出つさめか井といふ水夏ならハうち過まし

やおもふにかち人ハ猶たちよりてくむめり

むすふ手ににこる心をすゝきなハ浮世の夢をさめかゐの水

とそおほゆる十八日ミのゝ関関の藤川わたるほと

にまつおもひつゝけゝる

わか子とも君につかへん為ならてわたらましやハ関の藤川

不破の関屋の板ひさしハいまもかはらさりけり

ひまおほきふはの関屋ハこのほとの時雨も月もいかにもるらん

「(六才)」

関よりかきくらしつる雨時雨にすきてふりくらせハ道も

いとあしくて心より外にかさぬひのむまやといふ

所に*とゝまる

旅人はミのうちはらふ夕暮の雨にやとかるかさぬひの里

十九日又こゝをいてゝゆくよもすからふりつる雨にひら

のとかや*いふほど道いと*わろくて人かよふへくもあら

ねハ水田のおもをそさなからわたり行あくるまゝに雨は

ふらすなりぬひるつかた過行道にめにはつやしろ

あり人にとへハむすふの神とそきこゆるといへは

まもれたゝ契むすふの神ならハとけぬ恨に我まよハさて

「(六ウ)」

1も九
は残
2き九・永・残
3みるに九
4や九・永・残
5「十八日」欠残
6らる九
7は九

1くれはてねと残
2はらひ九
3ける残
4とかやと九
5いと九・永
6面九
7「そ」欠残
面残

8まほれ永

すのまたとかやいふ川には舟をならへてまさきのつ
な¹にやあらんかけと、めたるうきはしありいとあや
う¹けれとわたるこのかはつ、ミの方は*ふかくて
かた¹くハあさければ

かたふちのふかき心ハ有なから人めつ、ミにさ³せかるらん
かりの世のゆき、と見るもはかなしや身をうき舟をうきはしとして⁴
とそ⁶おもひつ、け^ける又一宮といふやしろをすくとて

一宮名さへなつかしふたつなくミつなき法をまもるなるへし
廿日尾張の国⁷おもと、いふむまやを*ゆくよきぬ道なれ
ハあつたの宮へまいりて硯とりいて、かきつけて⁹

(七才)

- 1 あやふけれど―残
- 2 いと―九・永・残
- 3 の―九
- 4 の―九
- 5 に―九・永・残
- 6 も―九
- 7 おりと(むまやを)―九
- 8 おりとといふ―残

9 「て」欠―九

たてまつりける哥書²く

いのそよわかおもふ事なるミかた³さしひくしほも神^袖のまに^くく
なるミかた和哥の浦風へたてすハおなし心に神もうつらん
みつしほのさしてそきつるなるミかた神や哀とミるめ尋て
雨かせも神の心にまかすらん我行さきのさハリあらすは⁵
*⁶

*しほひの程なればさハリなくひかたををゆく折⁹からも
濱千鳥いとおほくさきたちて行もしるへかほなる
ここちして

はま千鳥鳴てそさそふ世中に跡とめんとハおもハさりしを¹¹
すみ田川のわたりにこそありとき、し*都鳥といふとり¹²

「(七ウ)

- 1 「ける」欠―九・永・残
- 2 いつ、―九 五―永
- 3 「書きつく」欠―残
- 3 かた―九・永・残
- 4 うくらむ―永
- 5 な―九・永・残
- 6 契りあれやむかしも夢に「(も」
ミセケチ)見しめなほこ、ろにか
けてめぐりあひぬる―九
- 7 鳴海の渦を過るに―残
- 8 「を」欠―九・永・残
- 9 しも―九・永・残
- 10 「いと」欠―九
- 11 とめしとは―九
- 12 かと―九・永・残

のはしとあしとあかきハこの浦にも有けり

こと、はむはしとあしとハあかさりし我すむ方の都鳥とは¹
²

二むら山をこえて行にも山も野もいと、をくて³

日もくれはてぬ

はるくと二むら山を行すきて○すゑたとる野への夕やミ^猶

八橋にと、まらん*といふくらさに橋も見えすなりぬ⁴

さ、かにのくもてあやうき八橋を夕暮かけてわたりぬる哉⁶
⁵
⁷

廿一日八橋をいて、行にいとよくはれたりやまもと⁸
⁹

をき原野をわけてひるつかたになりてもみちいと^行

おほき山にむかひて行かせにつれなき*ところくく¹⁰

「(八才)

ち葉にすめかへてけりときは木とも、たちましりて¹

あをちのにしきをミる心ちす人にとへハ宮ちの山と*いふ²
³
⁴

しくれけりそむる千しほのはてハ又紅葉のにしき色かへるまで

この山までハむかし見しこ、ちするに比さへかハラねハ⁵

待けりなむかしもこえし宮ち山おなし時雨のめぐりあふ世を

やまのすそ野に竹のある所にかや屋のひとつミゆるい⁶
⁷

かにして何のたよりにかくてすむらんとミゆ

ぬしやたれ山のすそ野に宿しめてあたりさひしき竹の一むら

日はいりはて、なを物のあやめも分ぬ程にわたうと*⁸
⁹
¹⁰

かやいふ所にと、まりぬ

「(八ウ)

1 こし 九

2 かと 九・永・残

3 「に」 欠 九・永

4 「も」 欠 九・残

5 き 永・残

6 危き 残

7 かねつる 九

8 日 九

9 「も」 欠 九・残

10 くれなる 九

10 わたうと、かや 九・永・残

1 ける 九

2 して 九

3 「の」 欠 九・残

4 そ 九

5 「に」 欠 九

6 「の」 欠 九

7 た、 九

8 「も」 欠 九

9 る、 九

廿二日の暁は夜ふかく有明のかけにいて、ゆく¹

いつよりも物*かなし³

住わひて月の都を出しかとうきミはなれぬ有明の影⁴

とそおもひつゝくるともなる人有明の月さへかさ

きたりといふを聞て

旅人のおなし道にやいてつらんかさうちきたる有明の月

たかしの山もこえつうみミゆるほといとおもしろし浦⁵

かせあれて松のひゝきすこくなミいとたかし

わか為やなミもたかしのはまならん袖のみなどの波はやすまで⁶

いとしろきすすきにくろき鳥のむれゐたるハ鶴と

「(九オ)

いふ鳥なりけり

しらはまにすミの色なる鳴つとり筆もをよハ、ゑにかきてまし¹

はまなのはしより見わたせハかもめといふ鳥いとおほ

くとひちかひて水のそこへもいる岩のうへにも居たり²

かもめゐるすすきの岩もよそならず波の影³こす袖にミなれて

こよひハひきまのしゆくといふ所にと、まる此所の大⁴

方の名*ハはま松とそいひししたしといひしハかり⁵

の人々なともすむ所なりすみてこし人の面かけも

さまゝおもひ出られて又めぐりあひてミつる命の

ほともかへすゝあはれなり

「(九ウ)

1 「は」欠―九・永・残

2 き―九・永

3 いと―九

4 は―九

5 あらし―九

6 風―九

1 の―永

2 「ち」欠―永

3 かすこそ―九

4 く―残

5 を―残

はま松のかはらぬかけもたつねきて見し人なみに昔をそとふ
そのよに見し人の子むまこなどよひ出てあひしらふ³
廿三日天りうのわたりといふ舟にのるに西行かむか⁴
しも思ひいてしていと心ほそしく見あハせたる⁵
舟た、ひとつにておほくの人のゆき、にさし
かへるひまもなし

水のあはのうき世にわたる程をミよはや瀬の小舟*さほもやすめす⁶
こよひはとをつあふミ見つけの里といふ所にと、まる⁸

さとあれて物おそろしかたはらに水の井あり⁹

たれかきてミつけの里を聞くからにいと、旅ねそ空おそなしき¹⁰

「(十才)

1を―九・永・残
2「む」欠―九
3ぬ―九
4ち―九
5「いと」欠―九
6を―九
7瀬、に―九
8こう―九
こふ―残

9江―九
10の―残

廿四日ひるに成てさよの中山こゆ*るのまくとかやいふ¹
やしろのほともみちいと*おもしろし山陰にて嵐も⁴
およハぬなめりふかくいるま、にをちこちの峯つ、き
ことやまににす心ほそくあハれなりふもとの里⁵
にきく川といふ所にと、まる

こえくらすふもとの里のゆふやみに松風をくるさよの中山⁶
暁をきてミれ八月もいてにけり

雲か、るさよの中山こえぬとハ都につけよ有明の月⁷

河おといとすこし

わたらんと思ひやかけしあつまちに有とハかりハ菊川の水

「(十ウ)

1や―九・永・残
2とのま、と―九
とのまくとかや―永
ことのま、とかや―残
3「かや」欠―九
4さかりに―残
5「に」欠―九
6や―残
7や―九・永・残

廿五日菊川をいて、けふハ大井川といふ川をわたる水

いとあせてき、しに*¹たかひてわつらひなしかハラいく

りとかやいとはるかなり水の出たらんおもかけを

しはからる

おもひ出る都のことハ大井川いくせの石の数もおよハし

うつ山こゆるほどにしもあさりの見しりたる山

ふし行あひたり夢にも人をなとむかしをわざと

まねひたらん心ちしていとめつらかにおかしくも哀にも

やさしくもおほゆいそくみちなるといへハふミもあ

またハえか、すた、やんことなき所^心ひとつにそ

「(十一才)

1は―九・永・残

をとつれきこゆ

我心うつ、ともないうつの山夢¹にもとをきむかしこふとて²

蕨かへて時雨のひまも³うつの山なミたに袖の色そこかる、

こよひハてこしとふ所にと、まるなにかしの僧正とか

やのほり*⁵とていと人しけし宿⁷かりかねたりつれと⁶

さすかに人のなきやとも有けり

廿六日わらしな川とかやわたりておきつの濱にうち

いつなくく出しあとの月影なとまつ思ひいてらる

ひるたちいりたる所にあやしきつけのをまくら⁸

ありいとくるしけれハうちふしたるに硯もミゆれは

「(十一ウ)

1ち―九

2みやこ―九・永

3ぬ―九・永・残

4の―九・永・残

5る―永

6たまふ―残

7「か」欠―九

8小枕―残

枕のさうしにふしなからかきつけ²

なをさりに見る³＊め斗⁴をかり枕むすひおきつと人にかたるな

くれかゝるほと清見か関をすくる岩⁵こす波のしろき

きぬをうちきするやうにミゆるいとおかし⁶

清見かたとしふる岩にこと、ハむ波のぬれ衣いくかさねきつ

ほとなく暮てそのわたりの海⁷のちかき里にと、まりぬ浦⁸

人のしハさにやとなりよりくゆりかゝるけふりの⁹

いとむつかしきにほひなれはよるの宿なまくさしと¹⁰

いひける人のことはも思ひ出らるよもすからかせいと

あれてなミた、枕¹¹のうへにてたちさはく

「(十二才)

ならハすとよそに聞こし清見かた荒磯なミのかゝるね覚ハ¹

富士の山を見れハけふりもたゝすむかしちゝの朝臣に^{2 3 4}

さそはれていかになるミの浦なれハなとよミしころ

とをつあふミの国までハ見しかハふしのけふりのすへも⁴

朝夕たしかに見えし物をいつのとしよりかたえ

しととへはさたかにこたふる人にもなし⁵

たか方になひきはてゝかふしのねの煙のすゑのミえすなるらん

古今の序のこと葉⁶までおもひ出られて

いつの世のふもとのちりか富士のねを雪⁷さへたかき山となしけん

くちはてしなからの橋をつくらはやふしの煙もたゝす成なハ

「(十二ウ)

1 しやうし—永・残

2 く—永

3 の—永

4 夢はかり—九

5 「る」欠—九・永・残

6 もおかし—九

7 「の」欠—九・残

8 「の」ミセケチ—永

9 り—九

10 「の」欠—永・残

11 枕にたちさはく—九・永

枕の上にたちさわく—残

1 よ—九・永・残

2 「も」欠—九

3 たゝす—九・永・残

4 糸—九・永・残

5 たに—九・永・残

6 とて—九

7 の—九

こよひハなミのうへといふ所にやとりてあれたるをと
さら²にめもあはず

廿七日明はなれて後ふし川をわたるあさかは
いとさむしかそふれハ十五瀬をそわたりぬる

さえわひぬ雪よりおろす藤川の河風こほる冬の衣手

けふハ*⁴いとうららかにて田子のうらに打出つあま

ともいさもりするを見ても

心からおも^りたつたこのあま衣ほさぬ恨と人にかたるな⁶

とそいはまほしき伊豆のこうといふ所にと、まるい⁷

また夕日のこるほと三嶋の明神へまいるとてよミ

「(十三才)

- 1 □□のやとりて—九
- 2 左右に—九・永
- 3 「を」欠—九・永・残
- 4 日—九・永・残
- 5 り—九・永・残
- 6 も—九
- 7 こつ—九

「心からおも^りたつ」—「り」ノ上ニ
「も」ト重ネ書キ、更ニ「りイ」ト
傍書

てたてまつる

あはれとや三嶋の神の宮柱た、こ、にしもめぐりきにけり

おのつからつたへし跡もある物を神ハしるらん敷島のミチ

たつねきてわかこえか、る箱根ちを山のかひあるしるへとそ思ふ²

廿八日伊豆のこうを出てはこねちにか、るいまた夜ふ

か、りけれハ

玉くしけはこねの山をいそけとも猶明けかたきよこ雲の空

あしからの山ハミちとをしとはこねちにか、るなり³

けり

ゆかしさよそなたの雲をそハたて、よそになしぬるあしからの山⁴

「(十三ウ)

- 1 に—九
- 2 をそとふ—九
- 3 「の」欠—永・残
- 4 つ—九

いとさかしき山をくたる人のあしもと、まりかたし

ゆさかと*いふなるからうしてこえはてたれとふもとに¹

はや川といふ川ありまことに*はやし木のおほく³

なかる、をいかにと、へハあまのもしほ木を浦へ出さん

とてなかずなりとふ

あつまちのゆさかのこえてミわたせハしほ木なかる、早川の水^を

ゆさかより浦に出てひくれか、るになをとまるへきところ⁴

なしいつのおほしまゝて見わたさる、海つら^{とをイ}をい

つこと*いふととへハしりたる人もなしあまの家のミ⁶

そある

「(十四オ)

あまのすむその里のなも白なミのよするなきさに宿やからまし

まりこ川といふ川をいとくらくてたとりわたるこよひ

はさかはといふ所*と、まるあすハかまくらへいるへし¹

といふなり

廿九日さかはを出て濱路をはるくとゆく明はなる、

うミつら²をいとほそき月出たる³

浦路行心ほそ○を波まより出てしらする有明の月^さ

なきさによせかへるなミのうへに霧たちてあまたあり⁴

つる舟*見えつなりぬ⁵

蟹小舟こき行かたをミせしとやなミに立そふ浦のあさ霧

「(十四ウ)

1 ぞ九・残

2 は九・残

3 いと九・残

4 「なを」欠・残

5 とをし九・永・残

6 か九・永・残

7 と九・残

「ゆさかの」―「の」ヲミセケチ右
二「を」ト墨書

1 「に」―九・永・残

2 のうへを―九

3 り永・残

4 見え九

5 も九

6 す九・永・残

都*とをくへた、り^{はてイ}ぬるもなをゆめのこ、ちして

立はなれ³ももうきなミハかけもせし昔の人のおなし世ならハ*

あつまにてすむ所ハ月影のやつとそいふなる浦ちかき

山もとにてかせいとあらし山寺のかたハらなれハの

とかにすこくてなミの音松の風たえすミやこの

音つれはい⁶つしか*おほ⁷つかなき程にしもうつ

の山にて行あひたりし山ふしのたよりにこと

つけ申⁸たりし人の御もとよ⁹りたしかなる

たよりにつけて有¹⁰し御返事とおほしくて

旅衣涙をそへてうつの山時雨ぬひまもさそしくるらん¹¹

「(十五才)」

1の一九 2はて一九・永・残

3わか一九

4(この後にあり)一九

安嘉門院四条^釋作

中院大納言 置文和歌

日吉百日參籠之

時日哥之内也

いとほる、なにかいのちのつれな

くて、猶なからへは子はいかにせ

むふるさとに千世もとまてはお

もはすと、とみのいのちをとふ人

もかな

5「の」欠一九 6「は」欠一九

7に一九 8て一九

9ひんに一九 ひんきに一九

10御返し一九

11れけむ一九

*ゆくりなくあくかれ出しさいよひの月やをくれぬかたミなるらん^{へ2}

都を出し事ハ神無月*十六日なりしかはいさよ

ふ月をおほしめしわすれさりけるにや*いとやさしく

あはれにてた、この*かへりことはかりをそ又聞ゆ*

めぐりあふすゑをそたのむゆくりなく空にうかれしいさよひの月

前右兵衛督為教*の御女哥よむ人にて勅撰にも

たひく、いりたまへり大宮院の権中納言ときこゆる

人哥の事ゆへ朝夕申なれしかハにや道のほと

おほつかなさなどおとつれ給へるふみに¹³

はるくと思ひこそやれ旅衣なみたしくる、ほとやいかにと¹⁴

「(十五ウ)」

1また一九

2へき一九・永・残

「らん」をミセケチ、右二

3なか月の一九

4「めし」欠一九

5り一九

6と一九・永・残

7御一九

8る一九・永・残

9ためのり君一九

「為教」欠一九

10「御」欠一九

11たひく、勅撰にも一九

12「権」欠一九

13使に一九

14袖一九

返しに¹

思ひやれ露も時雨もひとつにて山路分こし袖のしつくを²

この*せうとの*為兼の君もおなしさまにおほつかな³

さ⁴〇とかきて⁵

故郷ハ時雨にたちし旅衣雪にやいと、さえまさるらん

返し

たひ衣浦風さえて神無月しくる、空^{雲イ}に雪そふりそふ⁶

式乾門院のミくしげ殿ときこゆるハ久我の大政

大臣の御女これも続後撰より打つ、き二たひ三

たひの*家々のうちき⁷くにも哥^{きイ}あまたいり給へる⁸

「(十六才)

1 返し「に」欠 — 九

かへり事に — 残

2 へた、 — 九

3 御せうと「の」欠 — 九

4 中将 — 九

5 な — 九・永・残

6 雲 — 九・永・残

7 しうにも — 九

8 き — 九・永・残

人なれハ御名もかくれなくこそ*いまハ安嘉門院¹

に御かたとてさふらひ給ふあつまちおもひ

たちしあすとてまかり申のよしに北白川殿

へまいり*しかと*見えさせたまハさりしかハこよ²

ひはかりの出たち物さハかしくてかくとたにきこ³

えあへすいそき出*しにもこ、ろにか、りたまひて*⁴

音つれきこゆ草の枕なから年さへ暮ぬる心ほ⁵

そさ雪のひまなさ*とかきかあつめて⁷

きえかへりなかもむる空もかきくれて程ハ雲みそ雪になり行⁸

なときこえたりしを立かへりその御返事*たより⁹

「(十六ウ)

1 は — 九・永

2 たり — 九

3 みくしけとのは — 九

4 にし — 九

5 「たまひ」欠 — 残

6 たよりに — 九

7 き — 九

8 き — 永

9 な — 九・永・残

10 し — 永

11 あり — 九

あらハと心にかけまいらせ*つるをけふ*しはすの¹

廿二日*ふミまちえてめつらしくうれしさまつ何事⁴

もこまやかに申たく候に御かたかへの行幸*の御⁵

うへとてまきる、ほとにておもふはかりもいか、とほい⁸

なうこそ御たひあすとて御まいりありけるひし⁹

もミね殿のもみちミ*とてわかき人々さそひにし¹¹

ほとに後にこそかゝる*こと、もきこえ候しかなと¹³

やかくとも御たつねさふらハさりし¹⁴

ひとかたに袖やぬれまし旅衣たつ日をきかぬ恨なりせハ¹⁵

さてもそれより雪に成行とをしハかりの御返事ハ¹⁷

「(十七才)」

かきくらし雪ふる空のなかめにもほとハ雲みの哀をそしる

とあれハこのたひハ又たつひをしらぬとある御¹

返しはかりをそきこゆる²

心から何うらむらん旅衣たつひをたにもしらすかほにて

暁たよりありと聞て夜もすからをきめて都のふミとも

かくなかにことにへたてなくあハれにたのミかハし

たるあね君におさなき人々の事*さま〜にかき³

やる程れいの波風をけしく聞ゆれハた、いまある^は

ま、の事をそかきつけける⁵

よもすから泪もふミもかきあへすいそこす風に独をきめて⁷

「(十七ウ)」

1 「に」欠残

2 さふらひ九

3 など九

4 御九

5 「や」欠九・永・残

6 七九

7 九

8 所九

9 九

「この」鉛筆デ書入
「所」鉛筆デ書入

10 候九・永

11 九・永・残

12 候九・永

13 御九

14 侍はさりし残

15 九

16 らすは九

17 九

18 候し

「ハかりの」欠 九・永

1 きか九

2 事九・永

3 など九

4 「に」欠九

5 「そ」欠九

6 つ九

7 浪九

又おなしさまにて古里には恋しのふおとうとの

尻うへにも文たてまつるとて磯ものなど*はしくも

いさ、かつ、ミあつめて

いたつらにめかりしほやきすさひにも恋しやなれし里のあま

ほとへてこのおと、ひふたりの返事*いとあはれにて*

ミれハあねきミ

玉つさをみるに涙のかゝる哉磯こす風はきく心ちして

このあね君は中院中将ときこえし人のうへなり

*三位入道と*おなし世なから*さかりはて、おこなひ

ゐたる人なりそのおとうとの君もめかりしほ

「(十八才)」

- 1 「は」欠九(は)「ミセケチ」永
- 2 「もの」欠九
- 3 の九・永・残
- 4 を九
- 5 「あつめ」欠九
- 6 く九・永・残
- 7 み九
- 8 かへり永 返 事 残
- 9 あり九

- 10 いそき九
- 11 も九
- 12 なかの院の九 中のいんの永
- 13 なかのあんの残
- 14 いまは九・永・残
- 15 か九・永・残
- 16 とを九・永 とほ残
- 17 「ゐ」欠九 永

やくとある返事さまくにかきつ*けて人こふる泪

の海は都にも枕の下にたゝへてなとやさし

くかきて

もろともにめかりしほやく浦ならハ中く袖に波ハかけしを

此人も安嘉門院にさふらひし*なりつ、ましくする事

ともを思ひつらねてかき*たる*いとあはれにもおかしほと

なく年くれて春にもなりにけりかすミこめたるなか

めのたとくし谷の戸*いとなりなれとも

ひすのはつ音たにもをとつれこす思ひなれに

し春の空ハ忍ひかたくむかしのこひしきほとに

「(十八ウ)」

- 1 りし九
- 2 「に」欠九
- 3 、九
- 4 「へ」欠九
- 5 「やさしく」欠九
- 6 の九
- 7 も九
- 8 な九
- 9 人九

- 10 かねて九
- 11 ひきつらねたるも九
- 12 「も」欠九
- 13 すゑはいと、しく(谷の)九
- 14 は(い)欠九・永・残
- 15 「も」欠九
- 16 「も」欠九
- 17 「の」欠九

しも又都のたよりありとつけたる人あれば

れいの所くへ¹の文かく中にいさよふ月とおと

つれ給へりし人の御もとへ

おほろなる月は都の空なからまたきかさりし波のよるく

などそこはかとなき事ともをかききこえたり²

しをたしかなる所よりつたハりて*返事をいた³

うほともへす待見たてまつる⁴

寝られしな都の月を身にそへてなれぬ枕の波のよるく

権中納言の君ハまきる、事なく歌を*よミ給人な⁵

れは此ほとてならひにし*たる哥とも*かきあつめて⁷

「(十九才)

- 1 ぬ (の) 欠 — 九
 - 2 「かき」 欠 — 九
 - 3 御返事も — 九
 - 4 「も」 欠 — 九
 - 5 方 — 九
 - 6 のみ — 九
 - 7 きを — 九
 - 8 も — 九
- 御かへりことを — 永・残

たてまつる海*ちかき所なれハかひなとひろふ¹

折*もなくさのはまならねハ猶なきこ、ちして²

など書て

いかにしてしハし宮こをわすれ貝波のひまなくわれそくたくる

しらすりし浦山かせも梅か、ハ都ににたる春の明ほの

はれくもりなかめてわたる浦風にかすミた、よふ春のよの月⁴

東路の磯山かせのたえまより波さへ花の面影にたつ⁷

みやこ人思ひも出ハ東路のはなやいかにとおとつれてまし

など*た、筆にまかせて*おもふま、にいそきたるつか⁹

ひとてかきさすやうなりしをまたほと*へす返事¹¹

「(十九ウ)

- 1 いと — 九
 - 2 折く — 九
 - 3 かひ — 九
 - 4 花 — 残
 - 5 そ — 九
 - 6 ふ — 九
 - 7 松 — 九
 - 8 そ — 九
 - 9 や — 九
- 10 うち — 九
- 11 も — 九

し給へり日ころのおほつかなさもこの*文にかす¹

ミはれぬる心ちしてなとはへり²

たのむそよしほひにひろふうつせかひかひある波の立かへるよを

くらへミよかすミのうちの春の月はれぬ心ハおなし眺を

しらなミの色もひとつに散花を思ひやるさへ面影に立⁴

東路のさくらを見ても忘れずハ都の花を人やとハまし⁵

やよひのすゑつかたわかしくしきわらハやミにや日ませに

おこること二たひに成ぬあやしうしほれはてたる心ち⁶

しなから二たひになるへき*暁よりをきゐて佛の⁷⁸⁹

御前にて心をひとつにしてほく糸経*をよミ¹⁰¹¹

「二十才」

- 1 御―九
- 2 あり―九・永・残
- 3 に―九
- 4 そ―九
- 5 思ひては―九
- 6 「し」欠―永
- 7 三たひ―九・永・残
- 8 日の―九
- 9 「ゐ」欠―九

- 10 「し」欠―九
- 11 やまき―九

つそのしるしにや名残もなくおちたる折¹²

しもミやこのたよりあれハかゝる事なと古里へ

もつけやるつゐてにれいの*中納言の御もとへ旅³

の空にて*あやうきほどの心ほそさもさすかに*たも⁴⁵⁶⁷

つ御法のしるしにやけふまでハかけとゝめて*と⁸

かけて^き

いたつらにあまのしほやく煙とも誰かハみまし風にきえなハ

ときこえたりしをおとろきてかへりこと*し給へり⁹

本ノマ、
きえもせしわかの浦*に年をへて光をそふるあまのもしほひ¹⁰

御経のしるし*いとたうとく*と¹¹¹²

「二十才」

- 1 「も」欠―永
- 2 り―九
- 3 権―九・永・残
- 4 玉きはるまでやと―九
- 5 ふ―残
- 6 「にたもつ」欠―残
- 7 なを―九
- 8 こそな―九
- 9 とく給へり―九

- 10 浦ち―九・永
浦道―残
- 11 こそ―九
- 12 と―九

たのもしな身にそふ友と成にけりたえなる法の花の契ハ

卯月のはしめつかたたよりあれは又おなし人の御許

へこそその春夏のこひしきなどかき*¹

ミしよ²こそかハラさるらめ暮はて、春より夏にうつる木末も

夏衣はや立かへて都人いまやまつらん山ほと、きす

そのかへり事又あり*⁵

草も木もこそミしま、にかはらねと有しにもにぬ心ちのミして

さて*郭公の御たつねこそ⁶

人よりも心つくして郭公た、二聲⁷をけふそき、つる

実方の中将の五月まで郭公きかてみちの国より

「(二十一才)

- 1 つ、け—九
- 2 に—九
- 3 し—九・永
- 4 返し「事」欠—九
- 5 返事 永・残
- 6 うちすてられたてまつりにしのちは—九
- 7 —九

ミやこにはき、ふるすらん時鳥関のこなたのミこそつらけれ¹

とかや申されたる事のさふらふなるそのためしと⁴

おもひ出られてこの*文こそことにやさしくなどかきて⁷

をこせ給へりさるほとに卯月のすゑに成*けれと郭公¹⁰

の初音ほのかにもおもひたえたり人つてにきく¹¹

ハひきのやつといふ所に*あまたの聲なきける¹³

を人き、たりなどいふを聞て

しのひ音ハ^日○きのやつなる郭公雲ゐにたかくいつかなのらん¹⁴

などひとりおもへともそのかひ*なしもとより東路ハ道の¹⁵

おくまで昔より時鳥まれなるならひにや有けん

「(二十一ウ)

- 1 りぬらむ—九
- 2 われ(其ためしと)—永
- 3 「る」欠—九・残
- 4 も—九
- 5 「て」欠—九
- 6 御—九
- 7 「て」欠—九
- 8 も—九
- 9 なりにけれと—九・永
- 10 は—残
- 11 け—九・残
- 12 は—九
- 13 「の」欠—九・永・残
- 14 り—九
- 15 こちつれとその—九
- 16 も—九・永・残

一すちに又なかつハ¹よ生まれにもきく人ありける
こそ人わきしけるよと*²心つくしにうらめしけれ
又くわ³とくもんみんの新中納言*⁴ときこゆるは京
極中納言定家の御むすめふかくさの前斎⁵
宮ときこえしに父*⁷中納言のまいらせおき給へ*⁸

まゝにてとしへ給ふ⁹にけるこの女院ハ斎宮の御
子にしたてまつり給へりしかハつたハリてさ

ふらひ給ふなり*¹⁰うき*¹¹こかるゝもかり舟なとよミ
給へり¹²し民部卿の典侍のせうとにてそおハ¹⁴
しける¹⁵さる人の子にてあやしき歌よミて人¹⁷

「(二十二才)」

1 み―九
2 おもふも中くいと―九
3 くはこくもん院―永
4 の君―九
5 「の」欠―九
6 「御」欠―九
7 の―九・永・残
8 りけ―九
9 ひ―永

10 けり―九
11 み―九・残
12 「し」欠―九
13 おとうと―九
14 「て」欠―九
15 する―九・永・残
16 里人―永
17 と―九

にはきかれしとあなちにつゝ、ミ給ひしかと¹
はるかになるたひの空*³おほつかなさにあハレ²
なる事ともをかきつゝ、けて

いか斗子をおもふつるの飛わつれならハぬ旅の空に鳴らん^か
とふミのこと葉につゝ、けて哥のやうにもあらず⁴
かきなし給へるも人よりハなをさりならず*⁵お
ほ御かへりことは

それゆへにとひ別てもあしたつの子をおもふ方ハ猶そかなしき⁶
ときこゆそのついでに故入道大納言*⁷草の枕にも*⁸
たちそひて夢に見えさせ給ふよしなどこの人ハ⁹

「(二十二才)」

1 「ひ」欠―九・永・残
2 「に」欠―九・永・残
3 の―九
4 「の」欠―九
5 ぬやうにおほゆ―九
6 こひ―九・永
7 の―九
8 つねに―九
9 「させ」欠―九

かりやあはれともおほさむとてかきつけ*たてまつる*²

ミヤこまてかたるもとをし思ひねに忍ふ昔の夢の名残を³
はかなしや旅ねの夢にまよひきてさむれは見えぬ人の佛
なとかきてたてまつり*しを又あなちにしたよした

つねて返事したまへり*しも*折からなりけり^{6 7}

東路の草の枕はとをけれとかたればちかきいにしへの夢
いつくよりたひねの床にかよふらん思ひをきつる露を尋て^{8 9 10}

などのたまへり夏のほとハあやしきまで音つれもた¹¹

えておほつかなさも一かたならず都のかたハしかの浦¹²

「(二十三才)

- 1て―九・永・残
- 2とて―九
- 3は―永
- 4か―九
- 5たり―九
- 6さ―九・永・残
- 7しのひ給事も―九
- 8―九

- 9ゆか―残
- 10け―九
- 11「も」欠―九
- 12き―九

なミたち*山三井寺のさはきなときこゆる*も^{1 2}

いと、おほつかなしからうして八月二日そ*つかひ³

まちえ*日ころよりをきたちける人々の*文ともと^{4 5 6 7}

りあつめてミつる侍従の宰相の君のもとより⁸

五十首の和哥をよミたりけるとてきよかきも^{9 10}

しあへす*くたされたる哥もいと*おかしく成にけり^{11 12 13 14}

五十首にて*八首にてんあひぬるもあやしく心のやミ^{15 16 17}

のひかめ*こそ*あるらめその中に^{18 19 20}

こころのミへたてすと*も旅衣山路かさなる遠の白雲²¹

とある哥をみるに*たひの空をおもひをこせてよ²²

「(二十三ウ)

- 1こえて―九
- 2に―九
- 3たしかなる―九
- 4て―九
- 5と―九
- 6「たち」欠―九
- 7御―九
- 8ためすけの(君の)―九
- 9「和」欠―九
- 10当座に―九
- 11ひんきすこしとて―九

- 12り―九・残
- 13、―九
- 14おとなしく―九
- 15「て」欠―九
- 16「廿」―九
- 17つ―九
- 18に―九
- 19は―九
- 20「る」欠―九
- 21て―永
- 22この―九

まれたるにこそ*いと心をやりて哀なれハその哥

のかたはらにもしちいさく*返事をそかきそへ

てやる

恋しのふ心やたくふ朝夕に行てハかへる遠のしらくも

又おなしたひの題にて*

かりそめの○枕草のよなくを9おもひやるにも袖7ぞ露8けき

とある所にも又かへり9ことをそかきそへたり11

秋ふかき草の枕に我そなくふりすて、こし鈴虫のねを

またこの五十首の歌のおく13にことはをかきそふおほ方*

哥のさまなと*しるしつけておく17に昔の人18々

「二十四才」

- 1は「い」欠と九・残
- 2て九
- 3し九
- 4は九
- 5侍従のうたに九
- 6よるく残
- 7そ九
- 8も九
- 9返事を九

- 10「そ」欠九
- 11る永・残
- 12五「この」九
- 13「歌の」欠九
- 14の九
- 15「の」欠九
- 16をほめも又よむへきやうなど九
- 17「の」欠九
- 18人「々」欠九・残

の哥

これを見ハいかはかりかと思ひつる人にかハりて音こそなかるれ

とかきつく侍従のおとうと為守の君のもとより

も卅首の哥を送てこれにてんのあひてわろからん

事をこまかにしるしたへといはれたり*ことし

八十六そかし哥のくちなればやさしくおほゆるも返くこゝろのやミとかたハラいたくなん

これも旅の哥にハこなたをおもひてよミたり

けりとミゆくたりしほとの日数をこの人々の

もとへつかハしたりしを*よまれたりけるなめり

「二十四ウ」

- 1事を九
- 2とか九
- 3出九
- 4「の」欠九
- 5「の」欠九・永・残
- 6「を」欠九
- 7年も九
- 8「は」欠九
- 9し「なん」欠九

- 10「たり」欠九
- 11ひなみの日記九
- 日記を永・残
- 12みて九

立別ふしのけふりを見ても猶心ほそさのいまかににそひけん

又これ*もかへしをかきつく

かりそめに立別ても子を思ふ思ひをふしの煙とそミし

又権中納言の君*こまやかに文かきて下給ひ*し後

ハ哥よむ友もなくてあきになりてはいと、思ひ*て

きこゆるまゝにひとり月をのみなかめあか

してなとかきて

東路の空なつかしきかたミたにしのふ泪にくもる月影

この御返事これ*も古郷とこひしさと

かきて

「(二十五才)

かよふらし都の外の月ミても空なつかしきおなしなかめは
都1*の哥ともこの後おほくつもりたりまたかき

つくへし

(以下 余白)

「(二十五ウ)

1 けに―九

2 に―九

3 は―九

4 いと―九

5 に―九

6 「も」欠―九

7 い―九・残

8 「事」欠―九

9 より―九

10 の―九・残

「と」欠―永

1 安嘉門院四條開法

作東日記―九

以下、九条家本欠

しきしまや¹ やまとの国ハ² あめつちの ひらけはしめし
 むかしより 岩戸をあけて おもしろき かくらのことは
 うたひてし⁴ されはかしこき ためしとて ひしりの御代の⁵
 道⁶しるく 人のこゝろを たねとして よろつのわざを
 こと⁸の葉に 鬼神までも あはれとて やしまの外の⁹
 よつのうミ 波もしつかに おさまりて 空吹かせも
 やはらかに 枝もならさす¹⁰ ふる雨も 時さたまれば
 きみくゝの みことのまゝに したかひて 和哥の浦路の
 もしほ草 かきあつめたる あとおほし¹¹ それか中にも
 名をとめて 三代までつきし¹² 人の子の¹³ おやのとりわき

「(二十六才)

1の―鈴 2、―永
 3しはしめ―永・慶
 4ときく―永
 5世にも―永・鈴(御世の―松・残)
 6道しるる―慶 すてられす―永・鈴
 7情に―永
 8なりければ―永
 9なひくなり―永 なひくめり―慶
 10を―鈴

11く―残
 12つ、く―永
 13に―永・鈴・慶

ゆつりてし その〇ことさへ¹ ありなから おもへハイやし*³
 しなのなる そのは、木、の そのはらに たねをまきける^{4 5}
 とか⁶とてや 世にもつかへよ いける世の 身をたすけよと
 契りをく すまと明石の つゝきなる ほそ川山の
 やま川の⁷ わつかに命*^{8 9} かけひとつ¹⁰ つたひし水の
 ミなかミも せきとめられて いまはた、¹⁰ ぐかにあかれる
 う¹¹をのこと ちをたえたる 舟のこと¹² よるかたもなき¹³
 わひはつる 子を思ふとて よるのつる なくく都*¹⁴
 いてしかと 身ハ数ならず¹⁵ かまくらの 世のまつりこと
 しけ、れと¹⁶ きこえあけてし ことのはの^も えたにこもりて

「(二十六ウ)

1をは―永・慶
 2もち―永・慶
 3いやしき―永・鈴
 4「き」欠―松
 5たる―残・静・鈴
 6「て」欠―鈴
 7やま川に―慶
 8わかかに―鈴

9を―永・慶
 10はや―鈴
 11いを―残
 12にて―永・鈴
 13く―松・永・残・静・鈴・慶
 14を―永・鈴・慶
 15ぬ―鈴
 16は―松・永・残・鈴・慶

梅のはな よとせの春に¹ なりにけり 行ゑもしらぬ
 なかそらの² 風にまかする ふる郷は³ 軒端もあれて
 さゝかにの⁴ いかさまにかハ なりぬらん 世々のあとある
 玉つさも⁵ さてくちはてハ⁶ あしからの⁷ 道もすたれて
 いかならむ⁸ これをおもへハ⁹ わたくしの なけきのミカハ
 世のためも つらきためしと なりぬへし 行ききかけて
 さまくゝに¹⁰ かき残されし¹¹ 筆のあと かへすゝも
 いつハりと おもハましかハ¹² ことハりを たゝすの森の
 ゆふしてに やよやいさゝか¹³ かけてとへ¹⁴ みたりかハしき
 すゑの世に あさハ跡なく なりぬとか¹⁵ いさめをきしを
 「(二十七才)」

10 いふ人あらは―永・慶

1に―慶
 2半天の―鈴
 3の―慶
 4に―鈴
 5、―静
 6はらの―残・慶
 7にせん―永
 8の―鈴
 9ぬ―永

わすれすハ¹ ゆへある事を² またたれか ひきなをすへき
 とはかりに 身をかへりミす たのむそよ³ そのよをさけハ
 さてもさは のこるよもきと⁴ かこちてし⁵ 人のなさけも
 かゝりけり おなしはりまの さかひとて⁷ ひとつなかれを
 くみしかハ 野中のしミつ よとむとも もとの心に
 まかせつゝ とゝこほりなき⁸ みつくきの⁹ 跡さへあらは
 いとゝしく¹¹ つるかをかへの¹² 朝日かけ 八千代のひかり
 さしそへて¹³ あきらけき世の¹⁴ なをもさかへむ
 なかゝれとあさゆふいのる君か代をやまとはに
 けふそのへつる¹⁴ 「(二十七ウ)」

1「わすれすは ゆへある事を」
 欠―鈴

2ゆかめることも―永・慶
 3ゆかめる事を―残
 3さけは―永・慶
 4聞は―松・残・鈴
 4り―松
 5ける―永
 6に―永・慶
 7に―永・鈴・慶
 8く―永・鈴・慶
 9わかかたへ―永・鈴・慶
 10かきくたされは―永・鈴・慶
 11また―永
 12よそ―永
 13よを―慶
 14ぬ―静
 け―鈴

此くたりより後はのちの人の事かき日記のうち

にハあらすのこるよもきとかちけるといふ所の

うらかきに皇太后宮大夫俊成*⁴ 卿の御女父のゆつり

とてはりまの国こしへの庄といふ所をつたへ上ら

れけるを*¹¹ さまたけて*¹² むさしのせんし*¹³ へことなる*

そせうには*¹⁶ まいらせられける哥ハ新勅撰にも

入侍るとやらん心のまゝのよもきのミしてといふ御

哥をかこちて申されける歌

とよまれ*²⁵ けれハひやうしやうにもよはず廿一ヶてう

「(二十八才)」

1 「此くたり」あらず 欠松・残・静・鈴・慶
2 後 欠 静
3 「の」 欠 松
4 2 後 欠 静
5 俊成の 欠 静
6 にゆの 欠 静
7 慶の 欠 静
8 地に 欠 静
9 頭 欠 静
10 地頭 欠 静
11 おほく 欠 静
12 候 欠 静
13 候 欠 静
14 候 欠 静
15 候 欠 静
16 候 欠 静
17 候 欠 静
18 候 欠 静
19 候 欠 静
20 候 欠 静
21 候 欠 静
22 候 欠 静
23 候 欠 静
24 候 欠 静
25 候 欠 静

1 昔松・水・残・鈴・むさ 欠松
2 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
3 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
4 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
5 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
6 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
7 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
8 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
9 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
10 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
11 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
12 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
13 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
14 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
15 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
16 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
17 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
18 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
19 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
20 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
21 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
22 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
23 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
24 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶
25 殿あ 欠松・水・残・鈴・慶 御・水・慶

の*¹ ひほうをみなと、められ*² けりその後野中
の清水をすくとて

忘れぬもとの心をしりかほに野中のシミつ影をたにミシ

と讀れたるもそのこしへの庄へ*⁷ ける時の哥也

新勅撰にも入侍り *

右阿佛坊と申人ハ定家*¹⁴ のよめ為家の最也

きんたち五人おハしけりはりまの国ほそ川の庄

を為家よりゆつりひえ¹⁹ りれしを為氏他腹た

るにより*²¹ あうりやくせられしとなりそせうのため*

「(二十八ウ)」

1 地頭の 欠松・水・残・鈴・慶
2 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
3 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
4 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
5 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
6 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
7 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
8 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
9 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
10 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
11 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
12 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
13 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
14 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
15 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
16 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
17 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
18 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
19 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
20 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
21 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
22 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
23 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
24 候けり 欠松・水・残・鈴・慶
25 候けり 欠松・水・残・鈴・慶

1 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
2 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
3 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
4 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
5 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
6 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
7 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
8 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
9 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
10 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
11 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
12 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
13 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
14 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
15 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
16 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
17 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
18 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
19 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
20 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
21 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
22 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
23 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
24 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴
25 室 欠松・水・残・鈴・慶 御前にて候 欠松・鈴

心にうかみしことはの日記にて侍るとなり

為氏²もろともに在鎌倉にて侍りしかとも

そせうハ為氏のかたへはつけられ侍らざりしと

かや*安嘉門院の四條と申も為相の母*この⁷

阿佛はうの事也⁸

阿佛房のかなふしゆ⁹

きよき心にまことをいたして一切*三宝に申事有¹⁰

それつねなき世のならひもとよりむなしきこと、¹¹

しりなからめの前の別にたえぬならひハ明ぬよの¹²
¹³

「(二十九才)

夢路にたとる心ちしてすくる月日もおもひよら¹

ぬに五の七かになりまた一時のけふりとこのほりし²

のち雨とやなりにけん雲とやなりにけんた、つく

くくと大空を*かこてともかよふまほろしのことつて³

もなけれハ玉のありかをそことたにしらすいつれ

もよそふるかたハことかハれともひとつ思ひハおなし

かるへしさてもこのいまハ昔になりぬる人ハとし⁴

ハ八そちのよはひ*二とせはかりやたらざりける⁵

時ハ九代の君にあひたてまつり家につたふる敷

しまの道ハ三代の撰者とそきこえしある

「(二十九ウ)

1 候(「となり」欠) 松・残・鈴・慶

2 為氏もちんぢやうのため(「に」)かまく

らへ下向 兩人ともにかまくらにて死

去せられ(「もろとも」)ししかとも

欠) 松・残 (「に」欠「られし也」)

3 鈴 為氏(「し」かとも) 欠「慶

つつけられす候也 松

4 あふつは 松・残・鈴・慶

5 人なり 松・残・鈴 人は慶

6 なり 松・残・鈴

7 阿佛はうの事也 欠「松・

残・鈴 慶」この「欠」静

8 にて候 慶 阿仏禪尼

9 安嘉門院 四條局 假名諷誦

10 阿仏禪尼 四條局 假名諷誦

11 九 四條局 假名諷誦

12 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九

13 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九

1 影 九

2 わか 九・尊

3 のみ 九・尊

4 「ハ」欠 九・尊

5 に 九・尊

世にもたえなること葉をのこしなき世にもか

しこき跡をとゝむるつかさハかけなひくにちか*

き位ハおほき二のしなにのほる世をのかれまこ

との道をたつねて*ふたつもなく三つもなき一

せう法華の行者にて日ごとにくしゆをつ

とむる事二千百十部やまひのゆかの今ハのきハ

までも念佛をこたる事なしつゝぬにしつかな

る心をひとつとしてをはりミたれさりしか

ハさりともとはなのうてなにおもひをくりて

もさらぬ別*あかぬ名残ハなをなくさむかた*

「(三十才)

なかりけるとし比ハうとはまのうとかりし

あたりなれと和かのうら地の波のたよりハ

いかなるえにかひかれけんふる里をもはなれし

たしきをもすて、かけのかたちにしたかふ

ためしなれとなたのしほやきいとまもなくふ

するのとこのゐをやすむひまたになくて

哥のミちをたすけつかへし事はたとせ

あまり三とせハかりに*や成にけんかせにちりしく

はなにさためなき世をたとへむすふいつミ

の水におもかハリぬるおひのすかたをいとひ木の

「(三十ウ)

- 1へ―九・尊
- 2「る」欠―九・尊
- 3つ―九・尊
- 4も―尊
- 5「にて」欠―九・尊
- 6つむ事―九・尊
- 7二千七百十余部―九
- 二千七百よふ―尊
- 8「の」欠―九・尊

- 9「も」欠―九・尊
- 10に―九・尊
- 11の―九・尊
- 12そ―九・尊

- 1り―九
- 2は―九・尊
- 3「と」欠―九
- 4も―尊
- 5す―九・尊

間の月の心つくしにもほとなくふけゆくかけ
 をおしミ霜と雪とにつもるにつけてもきえ²
 やすき命を思ふにもあさ夕はなにはつ³のよし
 あしをかたりあはせていにしへいまハの別ぬふ⁵
 しをしたかひよるもひるもほつけのちくをたの⁶
 ミておなしはちすのうへを契りをくはかな⁸
 き世におくれさきた、はかなしすむまれ*所を⁷
 つけしらせんともろともにかかひし事な⁸
 けきにあまる涙の床ハとけてぬるよもなけれ⁹
 はさたかなる夢をたにもみすうつ、に¹⁰

「(三十一才)

1の「九・尊
 2「も」欠「九・尊
 3「を」欠「九・尊
 4に「九・尊
 5「て」欠「九・尊
 6「か」欠「九・尊
 7む「尊
 8を「九
 9「も」欠「九・尊

10「も」欠「九・尊

とまる名残とてハなに、しのふ*とひとつにも¹
 あらぬ忘かたミにもよるのつるのこのうちの声³
 たえず*いたつらになけき*かなしまむよりは⁴⁵⁶
 佛のうてなにあつらへてたてまつりのりの⁷
 いりきをあふきてめつさいしやうしんをいのら⁸
 んにはしく事なくやとてけふの日にそあたり⁹
 給ひける地さうほさつ一鉢のすかたをか¹⁰
 きあらハしたてまつる法華経一部 *¹¹

(以下 余白)

「(三十一ウ)

1「、」欠「九
 2の「九・尊
 3「も」欠「九
 4「た、」欠「九・尊
 5ひとり「九・尊
 6「ま」欠「九
 7「て」欠「九・尊
 8滅罪生善「九
 9「も」欠「九・尊
 10「の」欠「九・尊
 11以下、山岸文庫本欠

不知夜記阿佛房鎌倉紀行也阿佛房

(白紙) 「(三十二ウ)

葛原親王十一代後胤佐渡守度繁女安嘉門院

右衛門佐為相卿母後為尼名阿佛房寛文

(白紙) 「(後遊紙一才)

年中焼失今於是模写而已

延寶五年冬後十二月十一日

昭和廿四年四月下浣

琳琅にて

右近衛權少将藤原判

岸廼舎

「(三十二才)

「(後遊紙一ウ・左下)

不知夜記 一冊 三条西家旧蔵本也 偶入余手中者也

(白紙)

┌ (後遊紙二ウ)

去六月中浣依囑于圖書寮遠藤氏、尔來多忙云云

九月廿七日与東伏見伯同道而到圖書寮、製本出来云云

└ (後見返し)

談数分、及朱子全書裏打修理、如遠藤氏者、難得

装潢師也云云

昭和二十四年九月廿八日、黄昏爽涼風、微月在

┌ (裏表紙)

半天 岸廼舍識之

└ (後遊紙二才・本学蔵書印左下部)